

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	シモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品における旅行体験の記述と語りの諸相：アメリカと中国の記述をめぐって
Author(s)	伊ヶ崎, 泰枝
Citation	フランス文学, 23 : 37 - 47
Issue Date	2001-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041043">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041043</a>
Right	
Relation	



# シモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品における 旅行体験の記述と語りの諸相

— アメリカと中国の記述をめぐって —

伊ヶ崎 泰 枝

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、1947年のアメリカ旅行、1955年の中国旅行について、それぞれルポルタージュ『アメリカその日その日』を1948年に、中国紀行『長い歩み』を1957年に出版している。この二冊の執筆は、数多く訪れた国の中で政治体制の異なるこの二つの国が彼女の関心を引いたことを示している。

アメリカ訪問以前のこの国に対する印象については、回想録『女ざかり』において、若きサルトルとボーヴォワールがドス・パソスやヘミングウェイの小説技法に傾倒し、またジャズやハリウッド映画にアメリカを見出していた様子が描かれている。その一方で、左翼知識人らしいアメリカ資本主義体制への嫌悪も表明しており、<sup>1)</sup> 憧れと反感が入り交じった複雑な感情を読み取ることができる。これに対して、中国についての言及は稀であり、ボーヴォワールはアジアの発展途上国であるこの国の異国性を強調し、「理解しようと努めながらも入っていけない国」(FC, II, p.79)であると述べている。毛沢東政権に対する情報がほとんどなく、神秘と誤解に満ちたイメージが先行する当時の状況から、この国をアメリカとは違った風に描き出すこととなる。

本論では、アメリカと中国の旅行体験をボーヴォワールが自身の作品にどのように反映させたかを、それらの記述の語りに注目しながらみていきたい。

## 1. 書簡『サルトルへの手紙』、『ネルソン・オルグレンへの手紙』にあらわれたアメリカの印象と『アメリカその日その日』執筆過程

1947年から1951年にかけての計5回のアメリカ旅行の度に、ボーヴォワールは起こったことの詳細をサルトルに書き送っている。中でも1947年の1月から5月にかけての最初の滞在の折には、アメリカで受けた印象、歓喜と発見を生き生きと書面で伝えている。

[...] je n'ai quasi pas dormi hier de jubilation [...] c'est mille fois plus formidable que ce que j'imaginai et je suis si tourneboulée que je me demande comment je pourrai prendre sur moi de préparer une conférence et de la faire

après-demain. (*LS*, p.278)

とりわけポーヴォワールはニューヨークの街に魅了され、書面はニューヨークの文字で埋め尽くされている。また2月28日の手紙では、「唯一のアメリカの思い出なので手紙をなくさないでほしい」(*LS*, p.318)とサルトルに注意を促している。帰国後、ポーヴォワールはアメリカについてのルポルタージュを1月25日から5月20日の日記という形で書くことを決意し、「メモはなかったが、サルトルあての長い手紙や手帳に書き込んだ面会の約束が記憶を助けた」(*FC*, I, p.180)と後の回想録の中で語っている。したがって、サルトルに書き送った手紙は、フランスに帰ってから回顧的に書いた日記である『アメリカその日その日』の第一の草稿であると位置づけることができる。

一方、最初のアメリカ滞在中シカゴで恋愛関係となったアメリカ人作家ネルソン・オルグレンとの間には、1947年から1964年まで文通が続くことになる。彼にあてた書簡のプライベートな一人称の語りの中で、例えば、ポーヴォワールはオルグレン以外には決して使わなかった「私の夫」という呼びかけを用いて、周囲の人々との関係、日常生活、後の回想録に書いたような幼少期、思春期の思い出の断片を語っている。最初の滞在からの帰国直後、時に日に二回ものペースで書かれた手紙の中で、ポーヴォワールは自分の仕事の現場をオルグレンに語っており、『アメリカその日その日』の執筆過程を窺うことができる。

Je parlerai de l'Amérique, et de moi; j'aimerai évoquer la totalité de l'expérience « moi-en-Amérique »; que signifie « arriver » et « partir »? « traverser » un pays? que signifie l'entreprise de « regarder » les choses, d'en saisir quelque chose, etc.? (*LNA*, p.28)

また、同書に知っていること全てを語るできない事情を説明し、これに関する見解と対応策を述べている。

Quel dommage que je ne puisse parler tout à fait librement des gens, ce serait plus intéressant: par exemple je ne peux dire tout ce que je sais de Richard Wright, il ne serait pas content malgré ma grande amitié pour lui. Même chose pour d'autres. Or un livre de ce genre n'a d'intérêt que par sa valeur de vérité. Je m'efforce de le faire vrai, et parler de l'Amérique c'est parler de tout un éventail d'Américains. (*LNA*, p.33)

オルグレンとのシカゴでの出会いの部分の記述を『アメリカその日その日』の中で省略することについては次のように書き送っている。

Evidemment je ne vais pas parler de vous et de moi, mais que sais-je de Chicago qui ne vienne de vous? Oui, je dois trouver un moyen de dire la vérité sans la dire. C'est exactement ça qu'est la littérature après tout : d'habiles mensonges qui secrètement disent la vérité. (LNA, pp.37-38)

このように作家同士の相互理解を前提として、執筆過程における制約や自らの文学観を書簡で伝えている。したがって、この時期のほぼボーヴォワールの日記にも相当するサルトルへの手紙とオルグレンへの手紙の中の一人称の語りの中で、アメリカ体験の第一印象およびルポルタージュ執筆過程の舞台裏を見出すことができる。

## 2. 『アメリカその日その日』(1948)

上述したように、ボーヴォワールは第一回目のアメリカ旅行からの帰国後、ルポルタージュ『アメリカその日その日』に着手し、その執筆途中の同年1947年に、オルグレンに再会するために二週間ほどアメリカに再び滞在し、この二度目の体験をも同書に織込んでいる。ボーヴォワールがこの作品に用いた日記形式は、作品構成の不在、および物語の論理の欠如によって特徴づけられる。<sup>2)</sup> 例えば、列車の中での黒人の寝台車係との会話について「このような細細としたことが、ここでは人々との関係を暖かく楽しくし、旅行を活気づける」(LS, p.315)と2月28日にサルトルに書き送っており、このエピソードを『アメリカその日その日』の中では2月23日の出来事として記述している。このように気紛れな順序をなす日記形式は一見なんでもない些末なエピソードを書き加えることを可能にしており、回顧的に書かれた『アメリカその日その日』はその日その日に受けた印象と感動の直接的な伝達を模倣していることがわかる。

また、この作品はボーヴォワールの最初の自伝的作品であり、「読書契約」を序文の中に見出すことができる。<sup>3)</sup>

A défaut d'une étude qu'il serait présomptueux de tenter, je peux ici apporter un témoignage fidèle. Comme une expérience concrète enveloppe à la fois le sujet et l'objet, je n'ai pas cherché à m'éliminer de ce récit : il ne saurait être vrai qu'en tenant compte des circonstances singulières, personnelles, où chaque découverte s'est effectuée. (AJJ, p.9)

事実、この日記の中の一人称はところどころでポーヴォワールの自伝的要素を誘い込み、とりわけ、外国に身を置くことで受けた感覚から、自身の中の記憶の連鎖によって幼少期の思い出がいくつもの場面で喚起されており、この作品に叙情性を与えている点は見逃せない。一例をあげよう。<sup>4)</sup> 飛行機の着陸に際して、語り手は次のような感想を綴っている。

C'est un scintillement de pierreries et d'escarboucles, des fruits de rubis, des fleurs de topaze et des rivières de diamants; je n'ai connu que dans l'enfance un tel éblouissement et une telle passion de désir. (AJJ, pp.13-14)

先程のオルグレンへの手紙にも «moi-en-Amérique» とあったように、アメリカの現在を体験を通して、日記形式によってその印象を書き写すことで、語り手であるレポーター自身の自伝的な要素を巻き込み、主観的、感覚的な表現をもたらしているのである。自身の目を見たものを、主観的となる危険を冒しながら忠実に証言するというこの態度こそが異色のルポルタージュを生み出しており、ポーヴォワール独特の手法であるといえよう。『アメリカその日その日』の一人称の語りは、ルポルタージュに要求される客観的なリアリズムと、自己を投入することによってもたらされる主観性との混合によって特徴づけられているといえる。

### 3. 『レ・マンダラン』(1954)における恋愛体験の小説化

1954年に出版された小説『レ・マンダラン』もまた、ポーヴォワールのアメリカでの体験を違った形で映し出している。この小説は、フランス知識人階層の戦後直後からの数年を描き出し、左翼知識人アンリの意識に内的焦点化された三人称の語り<sup>5)</sup>と精神科医アンヌによる一人称の語りのほぼ章ごとの交替の形をとっている。精神科医であるアンヌは第6章において精神分析学の国際学会のためにはじめてアメリカを訪れる。ポーヴォワールがオルグレンに出会ったのと同じようにアンヌは作家ルイス・ブローガンに出会い、第8章、10章にて彼と再会するために再び大西洋を渡る。

この自伝的作中人物アンヌとアメリカ人作家ルイス・ブローガンとの恋愛は、回想録『或る戦後』によれば、ポーヴォワール自身のオルグレンとの恋愛体験を数多くの部分において反映するものである。ところで、先程引用したオルグレンへの手紙にもあったように、この小説に語られているアメリカでの体験の大部分、すなわちオルグレンとのシカゴでの出会いは、ルポルタージュ『アメリカその日その日』の中で語ることを避けた部分に他ならない。回想録『或る戦後』の中でポーヴォワールは次のように証言している。

Mais je ne trouvai pas gênant qu'un épisode, long et important, demeurât marginal: l'amour d'Anne et de Lewis. Je l'ai raconté, pour le plaisir de transposer sur le mode romanesque un événement qui me tenait à cœur [...].

(FC, I, p.363)

この恋愛体験の小説化の過程で、1947年から1951年にかけてのポーヴォワールの計5回のアメリカ旅行は小説においてアンヌの3回の旅行に凝縮されている。また、1951年の最後のアメリカ滞在から小説刊行の1954年の間の、この体験を結晶化させた時の作用も指摘しなければならないであろう。

さて、いうまでもなく小説に描かれた恋愛物語は作家の想像力で発展させたものである。例えば回想録の中では、ポーヴォワールがオルグレンとの恋愛の終りを、「けりをつけるしかなかった。私はけりをつけた」(FC, I, p.343)と非常に簡潔に語り、シカゴでの思い出を不景気と左翼の分裂という行き詰まった時代の中で葬り去っている。一方、小説においては、この大西洋横断の恋愛の終局の悲嘆とフランス左翼の挫折はアンヌを自殺未遂へと導いている。最終章第12章にて、友人ポールのハンドバッグから奪った毒薬の小瓶を片手にアンヌは内省にふける。数ページに及ぶ彼女の独白を通して、彼女の人生への無関心、疲労、老いへの恐怖、孤独が読み取れる一方で、人生のさまざまな時期の幸福も反すうされ、自殺をあきらめる直前までの幾多の矛盾した思索の跡を読み取ることができる。

このように、作者自身の経験から出発しながらも、アンヌの一人称の語りによって、アメリカでの体験は小説的変形を伴って表現されている。作者の分身ともいえる主要登場人物の一人称の語りも、「自伝的欲動」<sup>6)</sup>によって自伝的な要素の流入を、すなわち、他の作品で語らなかった部分をもたらしたと指摘できる。ともあれ、ポーヴォワールは自由な想像力に委ねた虚構の一人称の語りの中で自らの恋愛体験を生き返らせているといえる。

#### 4. 回想録『或る戦後』(1963)への恋愛体験の記述

さて、『アメリカその日その日』の中で言及を避け、小説『レ・マンダラン』の中で「不正確に」(FC, I, p.176)、すなわち小説的変形を伴って語られた、作者の「生涯の中の唯一の本当に情熱的な恋愛」<sup>7)</sup>であるシカゴでのネルソン・オルグレンとの出会いのエピソードは、後の1963年刊行の回想録『或る戦後』の中で再度記述されることになる。この恋愛物語をもう一度とりあげ、事実を記述することで、1963年の時点から見た自らの過去の総括を行っている。ところで、一連の回想録の中でポーヴォワールはサルトルとの二人の関係のいわば修史官としての役割をも果たしている。<sup>8)</sup> このアメリカでの体験は、生活、思想を常に共有するサルトルとの関係においてという、小説とは異なる文脈の中でとらえ

られている。

Bien que j'aie raconté — très inexactly — cette histoire dans *Les Mandarins* j'y reviens, non par goût de l'anecdote mais pour regarder de plus près un problème que dans *La Force de l'âge* j'ai pris trop aisément pour résolu : entre la fidélité et la liberté, y a-t-il une conciliation possible ? A quel prix ?  
(*FC*, I, p.176)

このように、アメリカでの恋愛体験の記述は何十年と続いてきたサルトルとの関係を見直しその問題点を説明する機会となっていることがわかる。すなわち、二人の関係を必然的な結び付きとし、しかし同時にそれぞれの偶然的な恋愛にも余地を残すという、作者が回想録の中で「私たちのシステム」(*FC*, I, p.177)と呼んでいる関係の欠点は、互いの相手がそれ以上の関係を望む時に常にこの第三者が代価を支払うという結果としてあらわれてくるのである。

J'avais de mes liens avec Sartre une connaissance incommunicable ; au début les dés étaient pipés : les paroles les plus vraies trahissaient la vérité.  
(*FC*, I, pp.224-225)

「この点についてはやむをえない遠慮から記述の正確さを貫けなかった」(*FC*, I, p.177)と同回想録で語っている通り、率直な自伝は、作者とサルトルに深くかかわる人々の私生活をも巻添えにする。例えば回想録の中で「M」と呼ばれているドロレス・ヴァネッティをはじめとするサルトルの数多くの女性関係について、彼女の回想録では事実関係を省略したり、簡潔な記述にとどめている。『或る戦後』の序文における読書契約、すなわち、「率直さ」という読者との契約にしたがって、オルグレンとの恋愛を忠実に描くことによって、それまでに起こった類似の問題点をも照らし出し、サルトルとの関係を読者によりよく理解させる意図が窺える。<sup>9)</sup>

シカゴでの出会いから5回のアメリカ滞在と、恋愛の終局の記述は間接的にボーヴォワールの自伝における、彼女とサルトルという一人称複数「私たち」の語り的重要性を示す結果となっている。アメリカでの体験は一人称複数の語りの中に取り込まれ、この恋愛の人生に占める位置を1963年という時点から振り返り、自己検閲を受けた形で記述されているといえる。

## 5. 中国紀行『長い歩み』（1957）

1955年の9月から11月にかけての二ヶ月間、ポーヴォワールはサルトルとともに中国政府の招待を受けて中国に滞在している。この公的で政治的色彩の濃い旅行から戻った後で西洋社会にとって根本的に未知の国である中国について執筆に取りかかっている。『長い歩み』の紹介文の中で、著者は共産党政権下のアジアの国中国の特殊性を強調している。

Ce livre n'est pas un reportage : le reporter explore un présent stable, dont les éléments plus ou moins contingents se servent réciproquement de clés. En Chine, aujourd'hui, rien n'est contingent ; chaque chose tire son sens de l'avenir qui leur est commun à toutes ; le présent se définit par le passé qu'il dépasse et les nouveautés qu'il annonce : on le dénaturerait si on le considérait comme arrêté.<sup>10)</sup>

日記体の『アメリカその日その日』とは異なり、いくつかの主題ごとに書き分けられた文章から成る『長い歩み』は、社会革命をたどり続ける新生中国の長い歩みの段階を説明するための「現地で気紛れなしに行った研究」（*FC*, II, p.78）と位置づけられる。

さて、この中国に関するエッセイの中で、語り手の古い中国文化に対する一貫した視線を指摘することができる。例えば天地を抱擁する意図のもとに建てられた紫禁城を「世界を誰かの個人生活のばかばかしい次元に縮小し、世界を否定するものである」（*LM*, p.62）と否定的に紹介しており、同様に、故宮をとりまく小宇宙を模した庭園についても、「言葉とそれをあらわす対象との距離が大きすぎ、言葉であらわされた対象がばかげたものになっている」（*LM*, pp.70-71）と評している。西太后の宮殿については「一刻も早くこういう貴族趣味の醜悪さから逃げ出したかった」（*LM*, p.73）と語っている。この中国文明に対する印象とその印象を受けた理由を説明している部分がある。

A vrai dire, ce que j'ai entrevu à Pékin de la vieille civilisation chinoise ne m'a guère séduite. Et je me suis demandé avec perplexité dans quelle mesure la jeune Chine pouvait adhérer à son passé. [...] Bien que le style architectural de ces grands monuments soit d'origine populaire, ils n'expriment pas le peuple chinois, mais l'ambition des empereurs, leur souveraine solitude et l'oppression à laquelle ils soumettaient leurs sujets. (*LM*, pp.71-72)

このように、ポーヴォワールが民衆の生活からあまりに分離された「官僚と宮廷人たち

の文化」(FC, II, p.78)である中国の過去の遺産を評価していないことは明らかである。しかしながらこのあまりに断定的な拒絶の視線には、その美が「特権者のためのものであり人間の人間による抑圧と切断からなる」(LM, p.463)古い中国文化に対する、一種のイデオロギー的な断罪が含まれていると推測される。というのも、1966年にポーヴォワールが旅行したもう一つのアジアの国日本についての記述では彼女は個人的な好みをより自然に表現しているからである。回想録『決算の時』第5部の中で、サルトルとともに行った数多くの国の旅行のうち、日本への訪問は「政治的な態度決定を伴うものではなく」(TCF, p.343)気ままな旅に近いものであったと述べている。そして日本旅行においては、桂離宮の美しさを称え、上述した中国の庭園と同じように小宇宙を象徴している周囲の庭園についてもその魅力を書きとめている。<sup>11)</sup>同様に貴族町民文化に起源をもつ日本の伝統演劇についても魅了され、文楽については「私は子供のころから人形劇が好きだった」(TCF, p.361)という幼少期からの好みに言及している。ところが『長い歩み』においては、語り手が中国演劇、なかでも「民衆的であると同時に封建的であるというあいまいな性質をもった京劇」(LM, p.327)について語る時、語り手の関心はこの演劇鑑賞の個人的な感想を書き綴ることではなく、読者に京劇の今日の中国での論争、すなわち、近代的テーマへの適用への改革の困難とジレンマを照らし出すことにある。このように、くつろいだ、観光的な日本訪問の記述の文体と、厳密で個性のない『長い歩み』の文体とは対照をなしていることがわかる。加えて、『長い歩み』の中では一緒に中国を訪問したサルトルへの言及がまったくなく、中国の説明に対して一切の脱線を許さない厳格な語りがこのことより窺える。

また、『長い歩み』の中では、語り手は中国人の試みに共感し、しばしば楽観的な未来への展望を述べている。例えば、北京の古い地区の取り壊しについて、語り手は「ピトレスクなものを軽蔑し、未来へ信頼を置く姿勢に、進歩しつつある国に来たことを確認する」(LM, p.11)と感想を述べている。また、北京の街についても次のように語っている。

Les rues de Pékin n'ont pas de mystère : le «mystère» d'une ville implique la misère et le délaissement d'une partie de la population et l'existence de bas-fonds. (LM, p.51)

これらの観点は、下町の光に詩情を見い出すか、あるいは労働者の貧困を見出すかという小説『レ・マンダラン』の中での左翼知識人たちの議論を想起し、小説『美しい映像』のなかでギリシャの現実の貧困に目をつむり、古代遺跡のみに興味を示す主人公の父親の懐旧趣味的な視線と対照をなしている。ポーヴォワールにおける「ピトレスクなものへの

抵抗<sup>12)</sup>が『長い歩み』でははっきりと打ち出されていることがわかる。ピトレスクなものの中に裏にあるものを暴き出すこの視点はボーヴォワールにおける一つの «écriture engagée» に他ならない。

後年、ボーヴォワールが伝記作者にこの『長い歩み』について「実際に見聞しなかったことについてたくさんの嘘<sup>13)</sup>」を書いたと語っていることからわかるように、このエッセイは、中国の公式の楽観論を取り入れた一種のプロパガンダの側面を持つと指摘することができる。すなわち、『アメリカその日その日』のように自己を投入した形でのルポルタージュを書くことが目的ではなく、当時のフランス人にとって神秘と偏見に覆われた国中国についての啓蒙の書を書き、反共産主義者達に対して新生中国とその未来への闘いを擁護することが問題であったと推測される。ボーヴォワールがその政治体制に共感を示す中国は、個人的な要素が排除され、新左翼的な視線が偏在する一つの特徴的な語り、すなわち、中国寄りの政治的立場をとった «je engagé» をもたらしめている。

## 結 論

アメリカの5回の滞在が、書簡、ルポルタージュ、小説、自伝といった大部分の作品にその足跡を残した<sup>14)</sup>のに対して、公的な訪問である中国は一冊の政治的立場をはっきりととった、説明・啓蒙の書をもたらしめている。アメリカ資本主義体制への反感にもかかわらず、作品への影響を考慮するなら、ボーヴォワールはアメリカびいきであると結論できよう。<sup>15)</sup> いずれにせよ、本論でみてきた複数のテキストにおける旅行体験の記述の一人称の語り、いわゆる「自己物語世界的」な<sup>16)</sup>語り手のそれぞれの肖像が異なる事実は大変興味深い。すなわち、同じ旅行体験から出発しながらも、書簡のプライベートな一人称から、ルポルタージュ、小説、自伝の一人称、また個人的な要素を抑えた政治的な立場をとったエッセイの一人称にかけて、その体験の記述の配分・変形が行われていることは、語り手と実際の作者ボーヴォワールとの距離がそれぞれの語りにおいて異なることを示している。全作品を通じて自伝的な要素を反映させることの多いボーヴォワールであるが、ジャンルや政治的立場に応じて同じ一人称における自己投入の度合を加減している事実は、この作家の他の作品の語りを論じる際にも指標となるであろう。

## 註

作品の引用を次のように略記する。

AJJ: *L'Amérique au jour le jour*, Gallimard, 1954, Folio, tirage 1997.

FA: *La Force de l'âge*, Gallimard, 1960, Folio, tirage 1991.

FC, I et II: *La Force des choses*, Gallimard, 1963, Folio, tirage 1990.

*LM*: *La Longue Marche, essai sur la Chine*, Gallimard, 1957.

*LNA*: *Lettres à Nelson Algren*, Gallimard, 1997.

*LS*: *Lettres à Sartre 1940-1963*, Gallimard, 1990.

*TCF*: *Tout compte fait*, 1972, Folio, tirage 1991.

- 1) *FA*, p.162参照。
- 2) Béatrice DIDIER, *Le Journal intime*, PUF, 1976, p.140参照。
- 3) Jacques DEGUY, *La quête de l'enfance, le désir du récit, les intermittences du sens*, in *Revue des sciences humaines*, N°222, 1991-2, p.76および Philippe LEJEUNE, *Le Pacte autobiographique*, Seuil, coll. "Poétique", 1975, p.8参照。
- 4) その他の場面については次ページ *AJJ*, p.28, p.148, pp.177-178, p.404参照。
- 5) Gérard GENETTE, *Figures III*, Seuil, 1972, pp.206-211参照。
- 6) Eliane LECARME-TABONE, *Anne, psychanalyste*, in *Roman 20-50*, juin 1992, N°13, Presses de l'Université Charles-de-Gaule Lille III, p.91.
- 7) Deirdre BAIR, *Simone de Beauvoir*, Fayard, 1991, p.398.
- 8) Jacques LECARME, Eliane LECARME-TABONE, *Autobiographie*, 1997, Armand Colin, p.121.
- 9) この部分の記述にオルグレンからの手紙を引用し、彼の孤独や愛する女性を独占できない失意を描き出したこの本の出版に際して、ボーヴォワールはオルグレンへの1963年の手紙で、あらかじめ予告している。(LNA, p.606) これに対してオルグレンは遺憾の念を隠そうとはせず、文通は跡絶え、「彼女のしたことは嘆かわしいことである」と後年のインタビューにも答えている。(Jean-Pierre SACCANI, *Nelson et Simone*, Editions du Rocher, 1994, p.8参照。) フィリップ・ルジュンヌが *Le Pacte autobiographique* の中で触れている、自伝の真性さと他者への遠慮という問題、すなわち、ジイドが述べた「自伝よりも小説の方がより真実に近い」というあの一種の神話の所以を思わせるものがある。
- 10) Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *Les Ecrits de Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1979, p.179.
- 11) *TCF*, p.369参照。
- 12) Claire CAYRON, *La nature chez Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1973, p.203.
- 13) Deirdre BAIR, *op. cit.*, p.527および *LNA*, p.562参照。
- 14) アメリカでの見聞は『第二の性』(1949)にも影響を与えているが、本稿では割愛する。
- 15) Kornel HUVOS, *Cinq mirages américains Les Etats-Unis dans l'oeuvre de George Duhamel, Jules Romains, André Maurois, Jacques Maritain et Simone de*

*Beauvoir*, Librairie Marcel Didier, 1972, p.346参照。

16) Gérard GENETTE, *op. cit.*, p.253.